

現場の技術を踏まえた技術論、技術倫理の試み（企画主旨）

齊藤 了文（Norifumi Saito）

関西大学社会学部

デカルトは精神と物体の二元論をとっていた。その枠組みから始めてみる。

さて、自然は科学法則に従って動く。それに対して人間の自由が強調されることがある。ハンマーは人間の行動を少し強化し変形させることができる人工物である。ハンマーでくぎを打つ行為は自由な行為かもしれないが、釘が木にめり込むことは自然必然の動きとなる。

人間の行為ではなく、人工物に焦点を当てよう。板にくぎを打ってテーブルを作る場合、作られたテーブルには私の「意図」が実現されているだろう。この場合、因果関係だけの世界の中に「意図」といった主観的なものが実現されている、とすることができる。

自然物だけに囲まれた世界を窓から外に向かって見ると、そこには個人の意図は存在せず、因果関係だけが支配することになるだろう。ただ、人工物に囲まれた世界は、物理的世界と言っても、製作者、技術者、メーカーなどの意図が実現された世界となっているだろう。

技術者はこのような人工物を作る。人工物は科学的因果関係で動いているのであるが、なぜか事故を起こしたりトラブルが生じたりする。

人工物、機械は私の意図的行為の結果として生じたはずなのに、そして、何が起こるかは、明晰判明に分かるはずなのに、実際その機械で何が起こるかは、それほど明らかではない。自動車でもスマホでも事故やトラブルは起こりうる。それは一つには、人工物は複雑な系になっていて、その帰結のすべてを見通すことはできないことにある。窓の外に見える星や月は、すっきりした法則に従って動いていることもわかっている。今おなかが痛いのは、さっき食べたサラダのせいだということが分かるかもしれない。原因（の一つ）が分析され、明確になることはある。

ただ、明確な原因が分かっても、それだけではものづくりには足りない。劣化も、耐性も、調べておかないと、部品としても使えるかどうかわからない。その意味で、非常に多様な知識がないとものづくりができない。

こういった現場に根差す人工物に注目したうえで、技術者倫理の教育では組織や安全基準などが存在する社会の中で、人工物が作られていることを学生に教えなければならない。こういう問題意識の下で、工学倫理の教育はどういうものとなるべきかをまず考えていく。

齊藤と直江は、哲学に近い論点に焦点を当てる。金光と藤木は、倫理にも焦点を当てて論じる。